
吾輩は猫なのだ！

抹茶小豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吾輩は猫なのだ！

【Nコード】

N2874Q

【作者名】

抹茶小豆

【あらすじ】

「ジャスト200文字の連作」

宮本家のヘタレデブ猫むっさんと家族の愛の物語。

愛猫の小ネタ集です。

むっさんの朝

吾輩は猫なのだ。

名前は武蔵。

しかし正式名称でその名をよばれたことはない。

吾輩は安眠を貪るご主人の顔にとりあえず鼻息を拭きかけてみる。

「やめてよ。むっさん」

そう言うのご主人は寝がえりを打った。

ここで引き下がる吾輩ではない。

今度は自慢の肉球でご主人の頬をビンタしてみる。

「ああもう！ ほら、おいで」

まんざらでもなさそうに、ご主人は布団の端を持ち上げてくれた。

こうして吾輩は朝の幸せな二度寝を楽しむのである。

こたつの王者

「今年の冬は特に寒いよね、むっさん」

こたつに足をつっ込んで、ご主人はテレビを見ている。

ご主人毎年同じこと言ってねえか？ と心の中で突っ込みながら

「なう」

ととりあえず相槌を打ってみる。

「ちょっと、美羽ご飯運ぶの手伝って」

と台所から母上の声がした。

ご主人は吾輩を膝の上にのせて、頭を撫でた。

なんかいい気持ち。

吾輩はご主人の膝の上でうとうと居眠りはじめた。

「今駄目なのよ。ほら」

ご主人は確信犯なのである。

デッド オア アライブ

これはゲームなんだよ。

ただし命を賭けた。

たとえそれがどんなに危険極まりない行為であったとしても
やはり吾輩の中に流れる猫としての本能が、吾輩を駆りたててしま
うのさ。

吾輩は出来る限り足音を忍ばせ、その場所に向かう。

勢いをつけ浴室の風呂の蓋に飛び乗った。

刹那、激しい水音が浴槽に響く。

「ふぎゃー！」

駆けつけた母上に抱きあげられる。

「むっさん！　なんであんたは毎回溺れるくせにお風呂の蓋の上に
座ろうとするの！」

駆け引き

「むっさん。ごはんだよー」

母上が吾輩の餌皿にキャットフードを入れる。

キャットフード。

通称（我が家では）カリカリという。

さあ、ここから駆け引きだ。

カリカリもそこそこに、吾輩は冷蔵庫の前でおねだりのポーズで座りこむ。

「なーう」

と一声可愛く鳴いて、ときどき潤んだ瞳で母上を見上げる。

「ああもう！ わかったわよ。かにかまあげるわよ」

母上は吾輩の大好物であるかにかまを、いつも冷蔵庫に常駐させてくれているのだ。

極道猫むっさん

おお？ お前どこのシマのもんじゃ？

むっさん、眉間に縦皺を寄せなんとも言えない表情。

おんどれ、誰に向かってメンチきつとんねん。

舐めるんは、またたびキャンデーまでにしとかな痛い目に会うで。

「シャー（威嚇）」

どうやら口で言うてもわからんらしいな。

うつりやつ、猫パーンチ☆

「ちょっと、むっさん。あんたなに鏡に映った自分の姿にマジ切れしてんのよ」

ああん。お母はん、放してえなあ？

むっさん、母上に抱っこされて退場。

テレビの思い出

宮本家はテレビを買い替えた。

「場所とるから」

と家族に嫌がられていたブラウン管テレビ。

しかしムッサンは、そんな旧型テレビが大好きだった。

なんといっても昔のものは温かみがある（昼寝にはもってこいだ）
テレビの上に寝転がりドラマのもっともいい場面で、たらりと画面
に尻尾を垂らすのだ。

「ああ、もうむっさんやめてよ！」

とか言われつつ、なんだかんだで家族の注目を浴びたかったむっさ
んであった。

さらば古き良き時代よ。

お父はんにおじゃまむし

お父はんが新聞を読んでいる。

「なーう」

むっさんはとりあえず親愛の情を込めて、お父はんの背中に頭突きをかましてみる。

「んー？」

お父はんは新聞から目を離さず、適当にむっさんをあしらう。

ちょっとムツとするむっさん。

がっさ、がっさ、がっさ。

むっさんは新聞紙の上に座りこんだ。

「あっくら！ むっさん、どきなさい」

「いややーん。わしこの上好きやねんもーん」

しかしそんな仕草も可愛いと思ってしまってお父はんであつた。

ご主人さまにおじゃまむし

「よう！ ご主人、何やってんだ？」

むっさんは机に飛び乗り、消しゴムを転がす。

「むっさん。あっち行っててよ。レポート今夜中に仕上げなきゃいけないんだから」

けんもほろろだ。

しかしここで退くむっさんではない。

むっさんはノートの上にどっかりと腰を下ろした。

するとご主人は、引き出しからミントガムを取り出した。

「臭っさ、なにこれ、ほんま臭っさ！！！」

そのときのむっさんの変顔を、ご主人はきっと生涯忘れないだろう。

その女

「おお、通子帰って来たんか」

ほろ酔い加減のお父はんが、上機嫌でリビングに入って来た女性を手招きする。

むっさんはお父はんの膝の上で、つまみをおねだりの最中だったが、不思議そうに侵入者を見つめた。

「なあに？　むっさん私の事忘れちゃった？」

通子と呼ばれた女はむっさんを抱き上げ、膝の上に乗せた。

「だったら、思い出させてあげるわ。その身体に刻まれた快感とにも」

「これはっ！！！！」

むっさんの身体に電流が走った。

その女2

「さあ、気持ちよくしてあげるわ」

通子の指テクに脱力するむっさん。

目を閉じてなすがままである。

「ほうら、やっぱり身体が覚えている。私があなたに刻みつけた焼印はそう簡単には消えやしないのよ」

人差し指、中指、薬指の3本で筋肉に沿って円を描きながら優しく撫でまさぐられるころには、むっさんは目をうっとりさせて、快感のあまり喉をごろごろと鳴らしていた。

快感に征服されたむっさんを見つめ、通子は笑いを忍ばせた。

愛玩動物を前にして、きっと誰もがやってしまうこと

「よし、よしよしよし。かーわいいですねえ」

下からのアングルで、微妙にメガネをずらす通子であった。

(はうううつ、き……気持ちいい……)

通子の指テクに、むっさんの前足が快感に震える。

「っていうか、お姉ちゃん！ むっさんでムツゴロウさんごっこするのやめてよね。お姉ちゃんがすると何気に変態プレイにしか見えないんだから」

そういつて部屋に入って来たご主人の腕には、なにやら見慣れないものが抱きかかえられていた。

小次郎登場

「ばぶばぶ。だああああ」

「小次郎のママは変態さんでちゅねえ」

そういつてご主人は、腕に抱いていた小さい人をソファアーの上に寝かせた。

むっさんは通子の膝からぴょんと飛び降りて、小さい人をまじまじと見つめた。

「ばぶばぶ、だあああ」

小さい人は上機嫌である。

むっさんはとりあえず匂いを嗅いでみる。

（ミルクの匂いがする）

むっさんはぺろりと小さい人を舐めてみた。

刹那……。

「うぎゃあああああ」

小さい人は大泣きした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2874q/>

吾輩は猫なのだ！

2011年5月14日12時19分発行